

霧の山

安川茂雄

霧の山

安川茂雄



朋文堂

著者略歴

本名長越茂雄、1925年東京に生る。早稲田大学仏文科卒業後大学院に学ぶ。現在三笠書房編集部長。

著書 「谷川岳研究」「谷川岳」「回想の谷川岳」「登山技術」

訳書 A. ヘックマイヤー「アルプスの三つの壁」パルザック「純愛」R. ランペール「山に闘う」ギド・レイ「わが回想のアルプス」

著者との協定により
検印廃止

昭和三十二年九月二十五日初版発行
昭和三十二年十二月十日七版発行
山岳文学選集一

霧の山

定価 二八〇円

著者 安川茂雄

発行者 新島章男

東京都杉並区永福町一〇三

印刷所 株式会社堀内印刷所

東京都千代田区神田三崎町二ノ一六

発行所 株式会社朋文堂

東京都千代田区神田猿樂町二ノ一五

電話東京(29) 三三二七九番

振替東京二五九八三番

「霧の山」について

井 上 靖

安川茂雄氏の「霧の山」を面白く読んだ。作者安川氏は登山家で、「回想の谷川岳」「谷川岳研究」「登山技術」等の著者として知られており、登山関係の翻訳も何冊か持っている。

従つて「霧の山」はわが国に於て、登山家に依つて書かれた最初の登山小説（かかる言葉があるとするば）と言つていいのではないかと思う。

この作品は一人の若い登山家を主人公とし、戦時中から戦後へかけて、彼とその周辺に現われる幾人かの登山家との交渉を描いたものである。この作品の中に書かれている遭難遺体の搜索や、戦死した登山家の遺骨を富士山頂に撒きに行く美しい挿話など、各章を構成している物語は、作者自身が実際に持つた体験と見聞ではないかと思われる。この作品の強さも魅力もそうしたところにあると言えよう。

何より読んで氣持のいいのは作者の山への愛情が作品全体に漲つてゐることであ

り、そして、すぐれた外国の山岳小説がそうである如く、友情、勇氣、信義といったものがタイトとなり、自然と人間、生と死の明暗がヨコイトとなつてわが国の小説には珍しい特殊な、一種壮重なトーンを持つた作品世界を構成していることである。読後の印象は新しく、爽やかである。作者が山を愛するように人間を愛し、山を肯定するように人間を肯定し、山に挑むように人間に挑んでいるからであらうか。

霧
の
山

目次

「霧の山」について

井上靖

第一章 単独登攀者

七

第二章 青い星

九

第三章 悲しみの谷間

一三

第四章 白い砦

一五

第五章 アルプスに還つた人

二一

第六章 薔薇色の山々

二五

あとがき

二〇

第一章 单独登攀者

昭和十×年の春――。

外は初夏を思わせる日和だつたが、天井の低い窓のちいさな部室は、其処に居合せた人びとの心のように薄暗かつた。つい三日ほど前に穂高の三月の合宿を終つて戻つたばかりなのだが、もしかすると今度の山行が山岳部で大規模に計画できる最後の合宿になるかも知れないと誰も心なか沈鬱な表情である。まだ数日間、春の学期末休暇はのこされていたが、装備係の部員だけ部室に集つて合宿で使した登山用具の手入れに励んでいた。

室内には足の踏み場もないくらいに寝袋、エアーマット、アイゼン、登山綱、ラジュニス、雪洞用スコップなどが様様な姿態で踞つている。みる人によつては得体の知れぬ品品である。いや品物ばかりではない、部屋にいる四、五人の部員たちの顔もじつに奇妙だ。雪焼けのために臉の周囲

だけ円く白い肌をのこして顔全体の皮膚は濃い樺色を呈してゐて、まるで動物園でみるメガネ猿そつくりであつた。

むろん恭一も同じ風手なのだが、傍目から部員の様におなじような奇妙な顔を見ると一週間ちかくのアルプスでの苦闘が今更のように偲ばれるのである。二坪程の狭い部室は、北向きで日当りの悪いのに室内はむされるような熱気が充満していた。それは登山用具からかす汗と埃のすえたような嗅気であり、一週間ものアルプス生活中に沁みた雪と氷の匂いであり、過酷な自然との闘いをあとづける若やいだ情熱のほとぼりかも知れなかつた。

扉口に背を向けて恭一も先刻からささくれだつたザイルに亜麻仁油を塗つていたが、その時、部室の建付のわるいドアを遠慮がちに軽くノックした。

「どうぞ」

ドアに一番近くにいた久保恭一が、ドアに背を向けたまま言つた。

ノックをして部室へ這入つてくる来訪者など珍らしい。

それだけでなくこの部屋の錆びて毀れたノブを開けるにはある種の技術が必要とされ、部室の定連でなければ仲々たやすく開けられなかつた。来訪者は案の定、恭一の声に促されたものの扉は開かなかつた。錆びついたノブの鈍い音が彼の背で暫くつづいた。それでも、やがて扉のあく音がしたので恭一は来訪者の方を振りかえつた。

黒サージの学生服を着た来訪者は、どぎまぎした様子で、恭一の方にびよこんとお辞儀をした。それから、低い声で「ちよつとお尋ねしますが」と丁寧に言つて、戸口からこちらに足もとの登山用具を踏まぬように留意しながら、室内へ入つて来た。

「これをお願いしたいのですが」

来訪者は学生服の内ポケットから一葉の名刺をとりだすと、恭一に差しだした。

名刺は植木五郎という部の大先輩にあたる人のもので、彼も一、二度O・Bの会合などで顔をみた覚えがあつた。

恭一が生れる以前、つまり日本アルプスの初期の頃の卓越したアルピニストであり、ヨーロッパの本場のアルプスをも登つた先覚者で、数冊の山の本も書いていた。

恭一は、その名刺の名前に思わず緊張して、汚れた油の掌をズボンにこすりつけると、来訪者の持参した名刺をもう一度眺めた。

「この名刺持参の宗方弘一君にラジュース一個貸与たまわれは幸甚です」という簡単な紹介文が山岳部の宛名と一緒にに名前のわきに太いペン字で認められてある。

「失礼ですが、あなたが宗方さんですか？」

名刺と来訪者と交互に見くらべながら恭一は言つたが、内心では予期しないものに接した驚きに戸惑つていた。

「はあ、ぼくが宗方ですが」

来訪者は、はにかんだふうな低い声で言つた。部室の奥で携帯天幕のほころびを修繕していた安斎や他の若い部員たちも、しぜんとお喋りをやめて或る好奇心をもつた眼差で来訪者の方を眺めていた。

いくぶん猫背気味ではあるが背は恭一よりもいくらか低いくらいだ。オーバーの襟もとからは詰襟の学生服が覗いている。その印象は、どちらかといえは律儀な感じでスポーツマンらしからぬタイプにみえる。それは確かにこれまで彼が宗方弘一という人物に抱いていた漠としたイメージ

とは余りにもかけ離れていた。どう見ても一見したところ来訪者の風態には、この高名なアルピニストをとくに飾りたてる効果は極めて乏しかった。ただ怒つたような美しい眼差、浅黒い色艶のよい皮膚、骨太の肉のしまつた四肢が山での不屈なスポーツマンとしての能力を恭一に暗に想像させるだけであつた。

この宗方との面識は意外なことであつた。恐らく年恰好はさほど恭一と隔たりのない筈であつたが、アルピニストとしての宗方は中学生の時分から、その名は知られ、アルプスの著名な山案内人である奥原豪造に連れられて数々の困難な山行を果したのだつた。

いつであつたか北海道の知床半島に厳冬期二人だけで出掛けたときなど予定の期間を一週間以上もすぎ、なお何の連絡がなく、遭難したのではないかという記事が一部の新聞に報道されたこともあつた。やがて奥原が深酒がたたつて健康を害し、山をくだつたが、これからは宗方は別の山案内人を求めるでも、パートナーをつれるでもなく、常に独りで山行をつづけるようになった。

それは大方の登山者が忌避する単独行という最も危険で

孤独にみちた山行である。かつては加藤文太郎という檜ヶ岳で死んだ稀代の「単独行者」がいたが、宗方の場合には単独行者というよりも、「単独登攀者」だつた。つまり加藤文太郎氏の場合はピーク・ハンティングが山行の主体だつたが、宗方は岩場を中心とした岩壁登攀がその山行の主旨標だつた。岩壁登攀の場合、単独だということはピーク・ハンティングとは比較にならぬほど困難であり、危険である。にも係らず彼は以前に劣らぬ烈しい闘志と異常なまでの山への執念で困難な岩壁を登つたのである。従つて、いずれの山のグループにも所属せず、いかなる登攀記録もかつて公表したことがなかつた。そのために時偶は彼の単独初登攀の成果を疑う者もいた。併しその嫉妬と羨望を多分にふくんだ中傷的臆測も、後続パーティが岩壁に彼の打つたハーケンを幾本かを発見して、宗方の行動に無言の評価があたえられたことも屢々だつた。しぜんとそんな彼の行為はさまざまな噂を生み、彼を知る人々の間では、その存在は一種英雄視されていた。恭一自身も宗方の「単独登攀者」としての類いまれな資質と行動に畏敬の念をいだいていたのである。

たしかにパーティを組んで出かける登山はさほど淋しいことはないが、いつたん季節はずれの山へ、単独でゆくようなことになる、自分が天地創造の原始世界にひとりぼっちで生きている感じで、その荒涼とした孤独感はやりきれないものがあつた。だから大方の登山者というものは、お互いに孤独での得難い忠実な隣人マルデイを求めてやまないのだ。それはマッターホルンの勇者ウインパーに、ミシェル・クロスの存在があつたように、登山のパートナーはお互い下界では想像も不可能な信頼と友情が生ずるし、その不羈の絆に結ばれてこそ、きつと純粹な情熱と行爲に憑かれた人々となりうるのだろう。

いつか、クラスメートで動物学に興味をもっている或る友人から、恭一の山好きなのを称して、「ヤマウズラみたいな感覚だなあ」と冗談めかして言われたことがあつた。はじめは、その言葉が一体なにを意味しているのか恭一には見当がつかなかつた。しかし、その友人の説明によると、動物の感覚にとつて、その関心の対象となる価値のある音響というのは大体動物自身によつて発せられるものだけなのであつて、つまり声と聲音だけなのである。

ひとつの例として、戦場で塹壕と塹壕が対峙し、鉄条網が迷路のようにはりめぐらされている中で、榴弾も機関銃の響きも聴えないかのように、ヤマウズラという鳥は嬉々として騒ぎまわっていることがよくあるが、この野鳥にとつては戦場での轟音など全く耳に入らず、ひたすら雄鳥のはなつ啼声だけが唯一の聴えてくる音なのだそうである。その友人は、おそらく山のこと以外にほとんど関心をいだかぬ恭一を單純にヤマウズラに揶揄したのであるが、そのような野鳥の素朴な生態というものに、忘れ難い羨望を感じたことがある。

併しながら、一人のマルデイも、クロスも存在しない宗方の徹底した単独登攀者としての意志と行動は、ヤマウズラより一層ふかく尊敬の念をもつて、恭一は眺めていたのである。たしかに彼がいつの頃からか身勝手に築きあげていた宗方のイメージと、実際に会つた印象とではだいぶんの隔たりがあつた。が、かえつてそれは宗方という存在がある者の化身か、それとも自分の想像を超えた架空性をおびた人物のようにさえ考えられてくるのだつた。

ラジュースを借りて宗方は何処の山へ出かけたのか噂に

も聞かなかつたが、半月ほどしてから一東の乾柿をそえて部室へラジュースを返却しに訪れたそうである。恭一は、そのときは不在だつたために宗方には会えなかつた。

この数年来、恭一はV状バットレスと呼ばれる岩壁の登攀にひそかにアルピニストとしての野心と光榮を夢みていた。

前穂高岳の北尾根から急角度に奥又白に向つて派生している岩尾根の末端に聳える扇型の胸壁で、約三百メートルの削ぎおとしたような絶壁を梓川に懸けていた。上部にゆくに従つて鋭角的に展られていて、その両端の灌木と藪の密生した岩稜は以前すでに登られていたが、中央の下部の岩溝状の壁と、その上部のバットレスはいまだに人間領域の外にあつた。幾人かの熟達した登攀者は、このアルプス最後の砦に惹かれて幾度かの挑戦と試登がこれまで企てられて来たが、いづれもその壁の嶮しさに敗退を余儀なくさせられて来た。その間に遭難も二回ほどあり、二名の犠牲者を出している。そして彼らの大部分は、この野心と光榮への情熱を空しく胸中に抱だきしめたまま山から下り戦

野へ狩りだされた。すでに、大陸での戦闘は、太平洋の中心部にまで拡大しつつあつた。

つまり山もしだいに出かけ難い時代となりつつあつたわけである。それでもこの一、二年はなんとか冬は山岳耐寒訓練とか雪中露営演習などと名目づけ、夏は山岳強歩訓練といった目的を要領よく牽強附会しては山行をつづけて来たのである。こんどの春山合宿も、あえて山まで木銃を持参して出かけたのであるが、それは山麓の部落に預けばなしにして、むかしどおり山を登るといつたあんばいだつた。

その間、恭一はなんとかV状バットレスに登りたいものと虎視していた。その岩壁は彼が恩誼ある先輩の小宮さんから教えられ、登るよう激励をうけた因縁のあるルートだつた。と同時に恭一は、自分の意志と情熱の象徴的な記念碑として、この壁に自分の初登攀としての名前をふかく刻みたいという功名心も強かつた。むろん自信のある登攀ではなかつたが、その達成が恭一の予期される陽炎のような自分の生涯での、せめてもの人間的所産となるかも知れぬと思つた。それは悲愴な又一面では感傷的な決意だつた。そしてもし戦死でもしたらその墓碑銘には、《穂高岳V状

バットレスを初登攀せし者、ここに眠る』とでも銘記して貰いたいものと彼はひそかに希つてゐた。せめてものこのヒロイックな觀念がいとおしく思われ、この岩壁をめぐつて青春の倨傲と感傷が、恭一自身にも存在しているという自覚がなにより貴重に思えるのだつた。

2

宗方弘一に再会したのは、その年の十月だつた。数人の若い新入山岳部員と一緒に、白馬岳、槍ヶ岳をへて北穂高岳、さらに奥穂高岳へ延々と日本アルプスの主要幹線ともいふべき山々を縦走したときである。山がまつたく初めての部員も幾人かいた。入部したといつても名ばかりで、穂高の春山合宿以来夏山合宿もろくにしていなかつた。ところが恰度、動員先の飛行機部品工場が疎開で一週間ばかり臨時休暇がとれたのを利用しての山行で、人つ子ひとりいない寂寥とした三千メートルの秋の山背を、六日ちかく歩きつめて六日目の午後に涸沢へくだり、夕刻には徳沢までたどりついた。

連日秋晴にめぐまれた長閑かな山旅であつた。ただ、この山行のあと幾度これらの新入部員について同行できると考えると、先輩として恭一は暗い気持ちになつた。これまで四季を通じて新入部員のころから山について学んだ数々の知識と体験は、恭一人間のものもつ誠実さと友愛と信義について自らに教えた。それは文字からでも言葉からでもない。灼けつく岩場でザイルを結んでの無言の信頼や、休息のテントでの些細な生活中から、しぜんと先輩から受けついで体験であり、吹雪の中で全身においかかる疲労と睡りへの闘いの果てに体得した困苦からの認識であつた。おそらく彼らとは彼らがそれらの貴重な体験を自分のものとするまでに共に山行をこれから重ねることは不可能なことかも知れなかつた。もしかすると彼らの幾人かは、乾パンを嚙り、乏しい食糧を食ひながら過したこの山行が、生涯での唯一度のアルプスでの印象となるかも知れないのである。恭一は彼らを厳しく指導するよりは、より美しいより豊饒なアルプスの想い出を彼らに抱かせてやりたかつた。そのために厳正なるリーダー、先輩としての責任感とは異質な、形容しがたい感慨をもつて彼らに對したのである。